1992年5月1日発行　（財）高知市文化振興事業団

文化高知 47

食料事情と農業

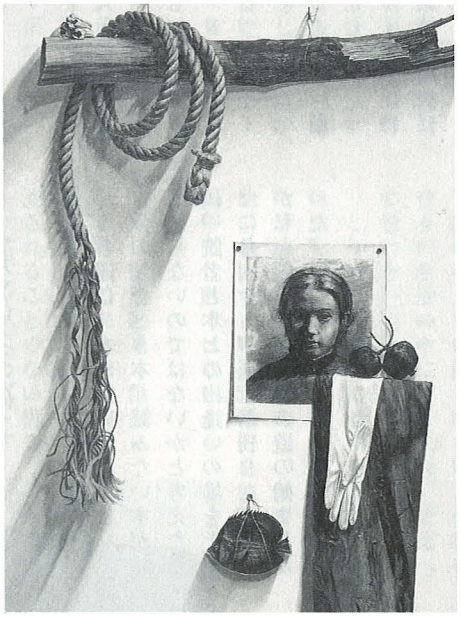
川野　忠顕

平成三年の農産物貿易動向が発表された。それによると輸出入ともに過去最高を記録し、農産物輸入額はついに三百億ドル（約四兆円）を超え、とどまるところを知らない勢いである。

中味を見てみると、タイからの豚鶏肉輸入が単価アップで大幅に伸びた他は相変わらず小麦、大豆、トウモロコシなど飼料穀物が上位を占める。しかし日常の食生活に関連したものも数多い。スーパーの売場をのぞいても、カボチャ（メキシコ）、キヌサヤ（台湾）、アスパラガス（ニュージーランド）等、枚挙にいとまが無い。国内産の端境期に、また産地表示をせずに売っているものが多く、ほとんどの人が知らず知らずに胃袋に収めているのが現実であろう。昼食に天ぷらうどんひとつ頼んでも、エビは台湾産、ころもはカナダの小麦、揚げる油はアメリカ大豆から、うどんの小麦はオーストラリア産という具合に、正にうどんは世界を駆け巡るし、私達をとりまく食文化も大きく変わりつつある。

また、このようなことを意識して食べる人は勿論いないが、カロリーベースで四七パーセント、穀物では三〇パーセントという自給率はどこから見ても不自然。食料不足が乱世を招き戦争工業で得た外貨で世界中の食料を買い漁り、コストの高い国内農業をないがしろにしてきた。補助金を付けて国内農業を支え自給体制を確立してきたアメリカ、イギリス、フランス、ドイツなどとは対照的だ。

マクロ経済を論じるエコノミストや経済合理主義を唱える財界の先生方は、こぞって米の市場開放を主張するが、石油が産業の米であるならば、産業を支える国民の食料供給も同じレベルで論じられるべきであろう。世界の三パーセントに足りない民族が、世界の十五パーセントの食料を消費することがいつまでも許されるとは思えない。国民の食料を安全にかつ安定して供給するのは国の義務である。世界の食料需給もひっ迫傾向にあり、加えて世界のあちこちで食料不足が言われている昨今、将来に備えて国内農業を建て直すことが先決で、米の市場開放云々はその後の問題であろう。



白い影 ー歳月Ⅱー（油彩）　加藤　勝久

翻って我が国は高度経済成長以後、の根源となってきたのは歴史が証明しているし、大戦後先進国がこぞって食料自給体制に心血を注いできたのは、そのような歴史上の経験が大きく作用している。

（高知県農協中央会長）

ハチキン万歳

難波多津子

清水の町から下川口を通り、宿毛へ向かう山の中の小さな村、宗呂に兄六人の後に一人娘として生まれた私は、物心ついた頃から、「ハチキン」と呼ばれ続けてきた。

つい数年前までの私は、この呼称に少なからず抵抗感を持っていたのも事実である。宗呂では、ハチキンとは、お転婆で我儘で気の強い女の総称だったし、私自身もそれだけの認識しかなかったからである。もっとも当時の私は、全くその通りの女の子だったから、何一つ反論する理由は見当らないのだが……。

○

私が十三歳の秋、父は突然に逝ったが、その直前に「自分の損得で動く人間になるな。女だからといって遠慮する事はない。やるべき事はこじゃんとやれ」と言い遺してくれた。まだ中学一年生だった私は、この言葉に強烈なインパクトを与えられた。

その後の三十数年の人生で、幾度となく転機があったが、最終的な決断をする際には、いつも父の言葉を想い出した。学生時代、ＮＴＴ時代、そして創現社の設立から、月刊オーパスの創刊時……。

十二年間勤めたＮＴＴを辞め、創現社を設立したのは一九七八年だった。当初は、編集、デザイン関係の仕事が主で、数年間は業績も順調に伸びていた。

その頃、若者の活字離れが社会的な問題となりつつあった。文芸書が売れなくなると、出版社はコミックやビデオの分野に進出した。企業や役所までも若者に迎合してマンガの案内書を作るようになった。活字離れはさらに深刻化したが、書店には本は溢れていた。コミックやビジネス書、タレント本などが店頭を占領し、文芸書や児童書は店の隅で小さくなっていた。

若者達は、本が嫌いなのではなく、自分の読むべき本、読みたい本が見つからないのではないかと考えた私は、読者と本との出逢いの場をテーマに月刊オーパスを創刊した。それが私と創現社の苦難の道の始まりだった。

やっと創刊一周年を迎えたパーティーの席上、日本文芸社の兵頭社長（宿毛市出身）は、「オーパスの創刊時に相談されたが、私は反対した。この種の出版は、理念は素晴らしいが、ビジネスとしては難しいというのが出版業界の常識だった。しかし何とか一年間続けたのは、彼女が土佐のハチキンだったからでしょう。ハチキンとは、損得だけでなく、自分のやるべき事に断固として立ち向かう女の事です」とスピーチして下さった。

私はこの時に初めて、長い間もち続けた「ハチキン」への抵抗感の全てを捨てることができた。

○

土佐のハチキンと同じように、群馬のカカア天下も、房州海女……も賛辞として使われていないのが私は残念である。風土的、経済的背景はあるにせよ、彼女達は男女雇用機会均等法の生まれるはるか昔から、男と同じように、いやそれ以上に働き生活を支えてきた。

キャリアウーマンなどとは、一味も二味も違う歴史と重さをもって。

男女雇用機会均等法のルーツは、彼女達の存在ではなかったのかと今私は考えている。

ハチキン万歳!!

（㈱創現社社長）

沈下橋は親水橋

武吉　孝夫

沈下橋を渡る時、私はいつも郷愁のようなものを感じる。

光るさざ波、小鳥の鳴く声、岩陰の小魚の群、川岸の柳、風にのる季節の香り、歳月と激流に洗われ切った沈下橋には、もう捨てるものは何も無い。これはもう洗われた岩に等しく、流れの上にリズミカルな橋桁の影を落す四万十川パノラマの点景として、風景に同化している。

沈下橋が主に造られたのは昭和三十年代で、戦後の貧窮経済からやっと抜け出ようとしていた頃、それまでの渡船や木造の低い仮設橋から、洪水の時だけは我慢をしても、流失することのない永久橋としての沈下橋へと、地区民にとっては、将来の夢を運んで来る希望の橋であった。

昭和三十三年建造の大正町上宮の沈下橋は、町の補助に、寄付と地区民の出役で造られたと聞く。その当時の出役の日当換算が四百円で、橋桁一個分五十万円の費用を要し、約一年近い工事日数であった。

また比較的新しい中村市勝間の沈下橋は昭和四十年に完成しているが、その袂に記念碑が建っている。

◇

県下第一ノ大川渡川ノ中流域ニ位スル勝間勝間川両部落ノ住民ハ昔ナガラノ渡船デ長イ間苦シンデキタ、教育文化産業等皆ノビナヤマザルヲ得ナイ宿命的ナモノデアッタ　―中略―

今後地域ノアラユル面ノ開発モ赤火ヲ見ルヨリモ明ラカトナッテキタ、誠ニ嬉シイ極デアル、地元民相ハカリココニ碑ヲ建テ限リナイ感謝ト感激ヲ記シテコレヲ後世ニノコスコトトシタ

◇

地域の人々は欄干のないこの橋を日々の生活の中にとり入れ、清流への想いをいっそう深化させてきた。

とりわけ子供達にとっては、川の自然を学び育くむ学習の場でもあった。沈下橋は生活、文化、教育その他において、戦後昭和史を象徴する民俗文化財ではないかと思う。

年に何度となく洪水にみまわれて来た四万十川の住民は、水に潜っても流されることのない構造をした沈下橋を、その時代の経済とてらし合わせ、選択してきた。

私は、生活道としての抜水橋が現在建造されることを、喜ばしく思うのだが、その陰でほとんど例外なく取り壊されている沈下橋の現実を見るにつけ、残念でならない。

四万十川ブームとは裏腹に、人々は水辺から隔てられるようになった。

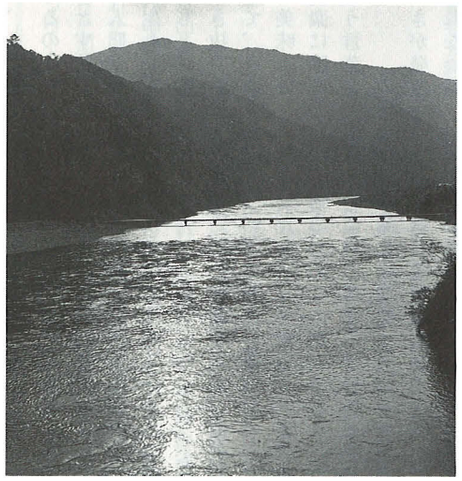
今、四万十川のあちらこちらに展望所のような施設が造られているが、さらに水辺近く降りくだって、沈下橋も歩いてみてほしいと思う。

きっと、渡る風、流れる水音、輝く水面に、川からのメッセージを聞かれることでしょう。

そして水面に近いこの橋上からのアングルが最も、民の川四万十にふさわしい挨拶であることを教えられることでしょう。

四万十川によくにあう沈下橋は、水に親しい「親水橋」である。

（フォトグラファー）



四万十川によくにあう沈下橋

高知の文化を考える

文化としての音楽

瀬戸口重利

高知の音楽界を概観してみると、年間を通じて、クラシック、ポピュラーを問わず、プロの演奏会をはじめ、いろいろなアマチュア団体の定期演奏会などが行なわれていて、催し的には結構事欠かない。また、昨年は創作オペラの地元公演が、多くの人々の協力のもとに実現した。その他、各種のコンクールなども盛んで、部門によっては全国で高い評価を得ることが少なくない。そして、全国的に通用する著名な音楽家も幾人かいて、高知県の誇りとなっている。このような状況からすると、高知県の音楽界が低調であるとは言えないが、そうかといって、隆盛とも言い難い。となると音楽を文化として考えようとするとき、これをどうみたらよいのであろうか。そこで、平素はよく知っているつもりの「文化」について、少し考え直してみたいと思う。

われわれは文化という言葉をよく耳にするし、口にもする。しかし、このような時、文化が宗教、芸術、学問、道徳などとして考えられがちであるが、これでは文化をあまりにも狭いものに限定してしまうことになってしまって、実際にはあてはまらない考え方のように思われる。文化はわれわれが社会生活をしていく際、各人が身につけていなければならない行動のすべてを指している。たとえば、われわれ日本人が食事に箸を使うのは立派な一つの文化である。そして、この行動は最も広い意味に解釈されるので、精神的行動をも含むことはいうまでもない。このような意味で音楽を文化の一つとしてとらえたいと思っている。

ところで、個人によって違いはあるかもしれないが、われわれは社会生活をするにあたって、音楽なしにはすまされない。それどころか、昨今では好むと好まないとにかかわらず、音楽の洪水に見舞われる。このような考え方をするために、まず初めに、文化は何のためにあるのかということを考えてみることとする。

一口にいうと、文化とは人間が死にたくないという欲望から生れたものではないだろうか。もともと、動物は死ぬことを欲せず、生き抜くためにはあらゆる方法を尽して、身の安全をはかり、できるだけ美味しいものを食べ、できるだけ安楽に眠ろうとする。これを本能という言葉で表現する人もいる。

また、人間は最も頭の働きが発達していて、他の動物に見られない特徴として、一つの大きな目的を果たすために、その準備になる仕事をうまくやり遂げる能力を備えているということがあげられる。その上、準備のための準備さえすることができる。それほど、人間は頭が良い。だから、直接日々の生活に役立たないこと、時として、本当の目的に反するようなことまでも非常に大きな目的を果たすために、あえて行なうことがある。極端な例をあげれば、動物のなかで自殺することが出来るのは人間だけであって、学問のため、芸術のために健康を損ね、それで満足している人さえいる。従って、人間の文化というものはまことに複雑で、何のために人間はこのようなことをしなければならないのかを見出すのが難しい文化すらある。しかし文化は飽くまでも人間を幸福にするためにあるという原理は不変であろう。

音楽は、初めは直接生活に役立てるものとして出来た。ところが、人間の社会生活の歴史が進むにつれて、元の働きと異なった働きが目につくようになってきた。

しかし、音楽の本当の社会的機能は全く失われているのではなくて、ちょっと見ただけでは本当の目的に反しているように見えても、実は本来の目的に沿っているのが現在の音楽の姿であるといってよい。だが残念なことに、現在ではかなりの経済力がなければ音楽技術を身につけることが出来ないという有様で、音楽は贅沢な文化であると思う人が多くなってしまった。

音楽はどうかすると、歴史上のいろいろの社会の指導者の側によって独占される運命にあった。例えば古代国家の支配階級は、音楽が他の芸術よりも直接人の心に訴える力を利用して、被支配階級の心持ちを和らげて、政治がしやすいようにし、また、支配階級の偉さを誇ることが多くの国で行なわれていた。そうして、音楽についてのいろいろな難しい理屈を考え出し、音楽に勿体をつけて、人々に有難がらせるようにもってまわった。只でさえ音楽は宗教と結び付いて、神秘的な力を持っているように思われているところへ、政治をする側でこのような工作をしたため、音楽は一般民衆の生活から離れて、何かしら特別のもの、尊いものと思われるようになった。この影響が今日まで及んで、音楽は贅沢なもの、何か特別なものと思われるようになってしまい、一般の人々は自分で音楽をやらないで、専門の音楽家にやってもらって、これを聞くだけで満足しようとする傾向が強くなっている。

もちろん、音楽はその才能を備えている人が上手になるのは当然ではあるが、人間として生まれたからには程度の差はあっても、だれでも音楽することは出来るはずである。音楽は聴いてばかりいたのでは、この能力を伸ばさずに終わってしまい、音楽は一般の人々から遠ざかっていく。そうなれば音楽文化の悲劇である。

音楽はプロの人だけのものではない。上手、下手は別として、老若男女それぞれの力に応じて、「音楽すること」が、文化としての音楽の姿であろう。従って、その意味での音楽人口が少しでも多くなることが先決で、その多寡が音楽文化のバロメーターであると考えたい。音楽文化イコール音楽会という狭い了見は捨てて、音楽文化について、できるだけ幅の広い考え方、見方が出来るよう心がける必要がある。

日常生活の中で、多くの人々によって「音楽がなされている」…つまり底辺の広さこそ確固たる音楽文化の水準を支える基盤となりえよう。このような視点で高知の音楽文化を眺めると、いま一歩の感がする。高知の音楽文化の裾野がより一層広がっていくことを心より期待するものである。

（高知大学教育学部教授）

高知の文化水準

木津川計氏の講演から

皆さん方は、高知の文化の水準をどうとらえているでしょうか。一度高知を離れて遠方から眺めてみますと、高知の文化の水準は非常に高いということが分かる。

高知県の出版文化賞は、'90年度までに二百十点にも賞が与えられている。或いは春の高知市の文化祭は、他府県が二十から三十位の事業でひらいているのにくらべると、六十から七十であり、市民の日常の文化活動がどれ位広がっているか、如実に示しているものといえる。

さらに、高知は市民が生み育ててきた文学学校の灯も消していない。文学学校は、実に東京と大阪と高知にしかないものです。

高知の演劇鑑賞運動である市民劇場が、七千人に達しているのも驚異的な事といってよい。

大阪は二千四百から二千五百人でしかないのに、高知で七千人の演劇鑑賞ファンが組織されている鑑賞運動というのは、誇るべきことといえる。

子供劇場が県下一帯に広がっているのも特筆されるし、全国の児童劇団をどれ位激励しているか分からない。

高知県展も何回か拝見させていただいたが、この水準は街中の市民がひらくものとしては非常に高いと思うし、ヤングピアニストの全国大会では、高知の少女二人が金賞を受賞して、外国へまた勉強に行ったりしている。昨年、坊ちゃん文学賞を受賞したのも幡多郡の高校生。

若い人達がパワーを失っていないということは、安芸郡北川村の青年達が中岡慎太郎の生誕百五十年祭で示してくれた。

歴史フォーラム土佐を成功させた加藤登紀子を招いてのダム湖上でのコンサートも異色の催しであった。大阪にいても、これらの成功の喜びが伝わってくる程であった。

高知に文化施設がないのかといえば、そうではない。安芸には書道美術館がつくられ、伊野には紙の博物館があります。或いは中村にトンボ自然館、高知市には自由民権記念館が誕生しました。これらをもっとPRして下さい。

この様に、既に文化のストックを土佐は持っているが、これら全体を結びつけながらトータルにPR、発信していく発信機能性で随分遅れをとっている。また、発信機能を充実させていくポジションも、行政内部につくられていないというのは、これから急速に改善されなければならないと思う。

（文責　編集部）

断章 ―高知の山と森―

(一) 三嶺と西熊の森

西村　武二

あなたは三嶺という山を見たことがありますか。それも平野部から。三嶺は香長平野を潤す物部川の源頭に位置する名山である。麓からは前山が視界を遮って望むことはできない。西熊の谷谷いからも、山腹からも、場所を選んでも木の間越しにしか見えない。森林がなくなるほどの高所に立たなければ、その全貌を捉えることはできない。物部川上流方面が遠くまで見通せて、白髪山や綱附森がよく見える南国市周辺でも三嶺は望めない。それほど山懐の大きい山なのだ。

ところがこの三嶺の見える場所がある。

冬のよく晴れた日、大気が澄みきって見通しのよくきく日がよいだろう。国道五五号線の赤岡と香我美の町境、香宗川左岸から北へ若一王子宮へ向かう道に入る。旧道に沿う町並みを抜けると視界が急に開け、目の前に田園が広がる。かつての塩の道といわれている北東の山北川上流方向の稜線のたわんだあたりに視線を移すと、雪をまとった峰々が青い空に際だつのがわかるだろう。一際奥まって堂堂と高いのが三嶺だ。

ここから距離にして約四〇キロもあるので、よほど条件のよい日しか見ることができない。双眼鏡があれば、三嶺の特徴である三つの顕著な尾根がはっきりと見てとれる。手前の尾根は右側の三角形の白髪山に伸びている。少し場所を移動すれば、三嶺の峰続きに西熊山、天狗塚、さらに西北西方向に目を転じると石鎚山系の手箱山（距離は約五五キロ）も見ることができる。

この地に来て三嶺を眺めれば、登ったことのある人にはささやかな満足感が、いつの日にか登ろうと思っている人にはいやがうえにも強い憧れが起こるにちがいない。

私が高知で初めて登った山が三嶺である。一九七〇年の秋、剣山からの縦走の時、白髪分れから堂堂とした三嶺を仰ぎ、頂上からは夕陽に輝く土佐湾や四国の山々を飽かず眺めたものである。西熊山、蹟峠（いざり）へと続く美しいなだらかな笹原の尾根道をたどり、森林の中の清冽な渓谷を下り、折りからの紅葉で体まで染まる思いがしたものだ。

あれから二〇年あまりもたった。その間、学生たちと、親しい友と、家族と、あるいは単独で何度三嶺や西熊の森を訪ねたことか。三嶺には全く人を飽きさせない魅力がある。

特に麓の森林の素晴らしさ。藩政時代に御留山として管理され、国有林に移管されてからも開発の手があまり入らなかったため、原生状態に近い森林が今に残されている。樹齢数百年にまで及ぶ巨木の森林は高度、緩急の斜面、渓畔などの環境に応じて様々な林相を見せてくれる。標高の高い所のダケカンバ林、ウラジロモミ林、緩斜面のブナ、ケヤキの森林、急斜面や岩石地のモミ、ツガ林、渓畔のサワグルミ、トチノキ、カツラの森林、林床のハイイヌガヤ、尾根筋の笹原、コメツツジの群落など、その植生は多様である。

小さな滝の連なる渓谷の美しさ、降雨の後でも濁水とならない清冽な流れ、それを縁取る渓畔の樹木、新緑、紅葉の時季は本当に素晴らしい。

様々な伝説や伝承を秘めたヌスビト岩、お亀岩、蹟峠（いざり）、さおりが原、剣山への山道を開いた伊勢の安蔵など、ロマン満ちた山域である。

これらの中をよく整備された登山道が延び、山小屋も適所に建てられているため、自らの能力に応じてコースと季節を選ぶことができる。技術のある人には沢登りや冬山登山の場も提供してくれる。

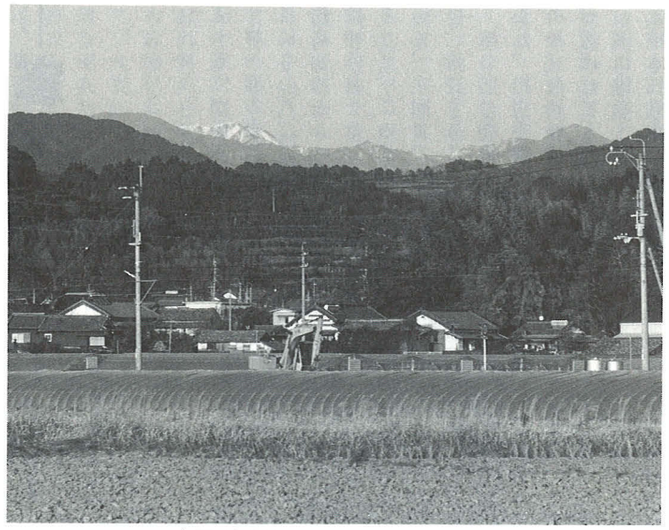
私は子供たちにこの森と山を幼い時期に体験させ、野性的な感覚を幾分なりとも身につけさせたいと思ってよく連れ出した。自然の中でこそ感じる安らぎ、張りつめた緊張感、そして何よりも自然への畏敬を実感するには、西熊の森のような原生的な森林の中で過ごすのが一番であろう。数百年経た巨木の森の中に身を置くだけで、幼い者なれば快適な日常生活からは得られない何かが心の深層に刻みつけられるはずだ。彼らが大人になって生活する時、この体験は彼らの宝になるにちがいないと思ったのだ。

まだ西熊の山桜が健在だったころ、花見の賑わいを離れて「さおりが原」まで足を延ばしたことがあった。

芽吹きはじめた木々の樹冠を通してやわらかい陽光が林床にさしこみ、沢のせせらぎをキラキラ光らせていた。見上げると山桜の花のかたまりが青空にまるで淡い雲のように浮んでいたものだ。林間の食卓で広げる弁当はささやかなものでも、よそでは決して味わえない贅沢であった。

河原にテントを張り、まっ暗闇の中で焚火に顔ほてらせながら楽しい一時を過ごしたことがある。翌日は時間をゆっくりかけ、渓流沿いの景色を楽しみながら、時には狭い桟道や橋に緊張しながら、三嶺の頂上に立った。子供たちは西熊の森で過ごしたあの日々のことをきっといつまでも憶えていてくれるだろう。

雪の時には輪かんじきをはいて稜線を歩いたものだ。雪でおおわれた尾根筋は道と関係なくどこでも好きな所を歩ける。大きな雪庇が張り出していて驚くこともあった。葉をすっかり落した木々は枝を黒々と灰色の空に伸ばし、ウラジロモミの樹冠は雪の付き具合によって白と黒のまだら模様となり、林床の植生は雪にすっかり埋もれ、平地では目にする機会のない墨絵の世界を見せてくれる。風がなければ踏みしめる雪の音以外、全ての音が雪に吸いこまれるような静寂の世界である。裂風は頬に痛い寒気を吹きつけ、体を萎縮させ、雪煙を舞い上げ視界を遮ぎる。木々の枝や岩には吹きつけられた雪氷が張りつき、雪とは違った様相を見せてくれる。しかし三嶺の冬は短く、厳しさも中部山岳にくらべればはるかに凌ぎやすい。初心者の冬山の入門としては最適の山域といえよう。



赤岡、香我美町境付近から三嶺を望む

私は晩秋の西熊の森が最も好きだ。冬の厳しい寒さには未だ至らず、汗ばむほどの暑さはもうない。朝の冷気が気を引き締め、黄葉、紅葉を通過した陽光が体を暖め、舞い散る落葉は翌年の樹木の再生を確信させてくれるからだ。落葉は樹木の葉という器官の死ではなく樹木の生長の糧なのだ。

「いくとせの前の落葉の上に
また落葉かさなり
落葉かさなる」

この季節、降り積った落葉を踏みながら西熊の森を歩くとき、この詩句を私はいつも反芻する。作者がどの様な情景の中でこの歌を詠んだのかわからないが、落葉を通じての生命の循環が安定している原生林のような深い森の中でこそ、この詩句はふさわしいように思われるのだ。

（高知大学農学部　助教授）

※

三嶺の登山コースや地名のいわれなどについては、『高知の森林』（高知県緑の環境会議森林研究会編、一九九〇年、高知市文化振興事業団発行）を参照していただきたい。

清遠　幸男〈高知レポート5〉
高知県の工業　A5判・一一二頁　定価一、〇〇〇円

土居重俊監修　高知市文化振興事業団編
土佐弁　土佐日記　B6判・一三〇頁　定価一、〇〇〇円

岡林清水著
高知県文学散歩　四六判・二七八頁　定価一、八〇〇円

高知の文化を考える会編
高知の文化を考える　A5判・一八八頁　定価一、二〇〇円

高知市文化振興事業団編
わがまち百景　A5変・二二四頁　定価一、二〇〇円

高知県緑の環境会議森林研究会編
高知の森林　B5変・二二八頁　定価二、五〇〇円

筒井広道著
画帳の歳月　A5変・二五六頁　定価二、〇〇〇円

上森千秋著
流れと波の科学　A5判・二四〇頁　定価一、五〇〇円

土居重俊著
土佐日記　付方言土佐日記全訳注　A5判・一一八頁　定価一、八〇〇円

土居重俊・浜田数義編
高知県方言辞典　A5判・七三六頁　定価六、〇〇〇円＊

高木啓夫著
土佐の芸能　B5変・三四六頁　定価四、八〇〇円＊

清水孝之著
中山高陽　A5判・三六二頁　定価三、八〇〇円＊

外崎光広編
土佐自由民権資料集　A5判・三四四頁　定価三、〇〇〇円＊

今井嘉彦著〈高知レポート2〉
いかにすれば都市の河川はよみがえるか　A5判・一〇八頁　定価一、〇〇〇円＊

外崎光広著〈高知レポート4〉
土佐の自由民権運動　A5判・一五六頁　定価一、〇〇〇円＊

＊は税抜き価格です

お申し込みは最寄の書店か事業団まで

第二回「高知出版学術賞」

『中岡慎太郎全集』など三点

―審査を担当して―

中内　光昭

昨年発足した「高知出版学術賞」の第二回の審査が先ごろ行われ、三点の業績に対して、去る三月二十八日、賞状と賞金が贈られました。

昨年に引き続き、私が審査委員長の大役を仰せつかりましたので、審査経過について、簡単にご報告したいと思います。

審査は、文化振興事業団から委嘱された、秋澤繁、池川順子、今井嘉彦、江草清子、紫藤貞美、西野勉、それに私の七名の審査委員により行われました。

審査対象になる業績は、「高知県内に在住する者の学術的著述、または他県等在住者による、高知県関連のテーマに関する学術的著述」のうち昨年中に発行され、かつ、推薦されたものに限られました。合計四十四件の推薦があり、重複を除いて、三十五点が審査対象になりました。

第一回の委員会は、本年二月十五日にもたれ、昨年度の審査の基準（文化高知四十一号参照）を再確認後、候補作品を十二点にまで絞りました。そして、この日選ばれた各作品について、次回までに、複数の委員が分担、精読することにしました。

第二回の委員会は、三月十日に開かれ、担当委員の意見を中心に論議の後、最終候補作品として次の六点が選ばれました。

『濱口雄幸―日記・随感録』
『植木枝盛集　全十巻』
『中岡慎太郎全集　全一巻』
『評伝　大町桂月』
『中枢神経系疾患のＭＲＩ』（英文）
『土佐藩主山内家歴史資料目録』

なお、この最終候補作品に残らなかったものの中には、出版物としては、第一級でありながら、内容が文学作品的色彩を帯びていて、本賞に馴染まないと認められ、除外されたものもあります。昨年も、芸術作品的色彩が強いという理由で除外された作品がありましたが、賞の性格上、残念ながら、やむを得ないことであると考えます。

最終選考に残った六点は、いずれも特色ある、優れた作品で、この中から、どの三点を選びだすかについては、議論は白熱、ときには、一度議論したことを再討議するようなこともやりながら、議論を進めていきました。その過程で、これらの作品のうち、どの作品が、〝高知出版学術賞に最もふさわしい特徴をもっているか〟についても論議され、選定の一つの視点について、ほぼ合意が得られました。それは、どの作品に賞を与えることが、本賞要項で述べられている「優れた学術研究が、地域の発展と文化の向上にとって極めて重要であることから、これの振興を図る……」という目的に最もかなっているか、という視点です。

結果的に授賞作品に決まった三点は、いずれも、この視点からみて、とりわけ当を得た作品であると言えましょう。一方、残念ながら最終選考にもれた三点も、異なった視点から見ると、授賞作品よりも優れていると言えるということでも、委員の意見は一致しました。

まず、これら三点についての、委員会の評価から紹介しましょう。

『濱口雄幸―日記・随感録』（濱口雄幸著・池井優ほか編＝みすず書房）は、今まで埋もれていた雄幸の日記等を世に出し、民政党関連の資料を提供した点でも大変重要な業績であると評価されました。

『植木枝盛集　全十巻』（家永三郎・外崎光広ほか編＝岩波書店）も、膨大な枝盛の資料を発掘整理し、十分に吟味の上、十巻にまとめられたもので、民権運動のみならず、広く明治思想史研究の上からも、貴重な業績であると評価されました。

『評伝　大町桂月』（高橋正著＝高知市民図書館）は、桂月の人物、考え方、業績などがよく整理され、著者の新しい解釈なども織り込みながら、よくまとめられている点が高く評価されました。従来の一般の桂月像に一石を投じるという点でも評価されました。

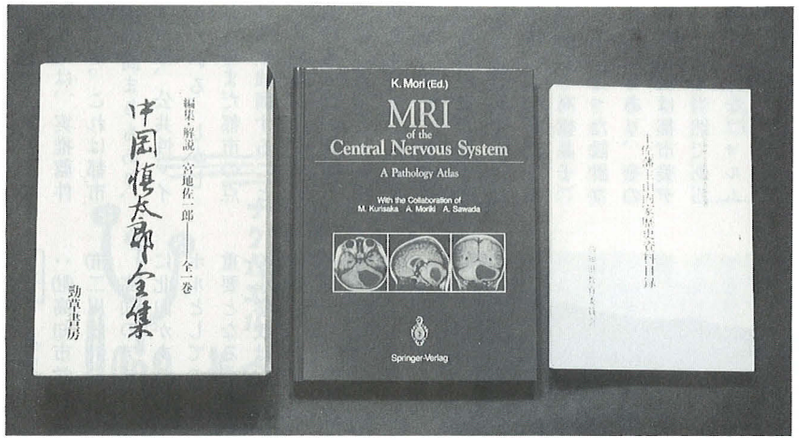
次に、授賞作品について、簡単に述べてみたいと思います。

『中岡慎太郎全集』（宮地佐一郎編＝勁草書房）

中岡慎太郎の関係史料は、故平尾道雄氏などの著作により、紹介されたのを最後に、本格的な調査、発表は行われていませんでした。本書は著者の多年の調査により、新しく発見された書簡二十一点を含め、全集として整理されたものです。内容の一部については、問題点の指摘もありましたが、著者の努力と、新資料の発掘の意義が高く評価されました。著者、研究対象者ともに、高知出身であることも、本賞の主旨に合致するとされました。

『MRI of the Central Nervous System（中枢神経系の磁気共鳴映像）』（森惟明著＝Springer Verlag）

最近、中枢神経系の疾患をＭＲＩを用いて診断する技術が開発され、近い将来、ＣＴに代わって、この分野の診断法の主役になる可能性もささやかれているそうです。本書は、高知医科大学のスタッフが、豊富な実例に基づき、その技術を解説したもので、この分野の権威者からも、「全体として、しっかりした構成で、写真も立派で、症例も豊富、総論のまとめもわかり易い。若干の難点はあるが、脳神経外科の日常の診療において、大変に有用な優れた書物であることは、間違いない」との評価をいただきました。



このような、国際的に通用する、普遍的、先端的な情報が高知から、直接、世界に発信される意義は大きいと思います。

『土佐藩主山内家歴史資料目録』（高知県教育委員会文化振興課編＝高知県教育委員会）

山内家伝来の美術工芸品および古文書類の全貌を明らかにするため、四カ年の歳月と、五十人のスタッフにより、整理された資料目録で、山内家の資料を通して、近世を研究するための、貴重な手がかりを提供した功績が高く評価されました。

極めて地味な仕事ですが、その解説において、新しい視点や分類法も提示されており、この目録を手がかりとして、多方面へ研究が展開されることが期待されます。

全体を通して言えることは、年々応募作品の質が向上していることと、学術分野に片寄りが見られるということです。前者については、まことにご同慶の至りで、高知にかかわる学術活動のますますの発展を期待したいと思います。後者については、特に、自然科学系の書物が少なく、発刊されても、応募されなかった優れた書物もあったようで、本賞についての理解を深める必要性が指摘されました。

その点で〝ＭＲＩ〟の授賞は大きな意味をもっていると考えられます。従来は、このような書物が、発刊されても、アカデミックすぎるということから、応募を尻込みされることが多かったようですが、今後はどしどし推薦していただきたいと思います。この種の活動に陽をあてることも、地域の学術振興や国際化にとって、大変、大切なことであると考えるからです。

最後になりましたが、熱心にご審査いただいた、各委員、事務局の方々、専門的な立場からの評価にご協力いただいた先生方に心からお礼申しあげます。

（高知大学学長）

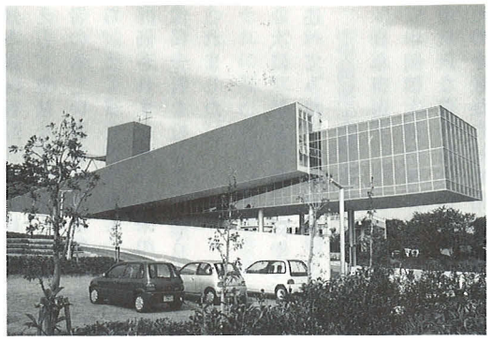
第八回高知市都市美デザイン賞

都市空間の美学

伊藤　憲介

うるおいや美しさは都市の魅力の大きな要素であり、また、社会的に構成される都市景観は、都市文化の視覚的表現であるといえる。

高知市都市美デザイン賞は、建築物や公園、広場等のオープンスペース、道路、橋梁等の土木構造物などの都市を構成する要素により、美しい街並み形成や都市の象徴的空間として評価しようとするものである。



高知県立坂本龍馬記念館

八回目を迎えた今回は、実推薦件数二十五件であったが、これは都市景観に対する認識の高まりもあり、市民レベルでの社会性、公共性マインドが浸透してきている。しかし、全体的な評価としてはまだ都市の点としてのシンボル性を強調することで主張しており、これは周辺を含めた面的な景観整備の方法論が課題となる。高知のアイデンティティを考えた場合、心的モティーフとして海と山と街がテーマとなるが、今回それらを象徴した建築物が賞となった。

特賞　高知県立坂本龍馬記念館〈発注者：坂本龍馬生誕一五〇年記念事業実行委員会、設計者：高橋晶子〉

全国レベルで話題となった設計コンペの当選案の具現化であり、そのコンセプトの強烈な表現は都市美デザイン賞初めての特賞も当然であろう。これは直截的で大胆なフォルムによって坂本龍馬のイメージを表現し、その個性的なデザインは明快で素晴らしい。維持管理の面で問題はあろうが、ハーフミラーガラスの建物が太平洋に正対している姿は印象的である。また、美術建築的雰囲気もあり、高知のシンボルたるにふさわしい。

入賞　高知市立久重小学校〈発注者：㈶高知市学校建設公社、設計者：㈲二川設計〉

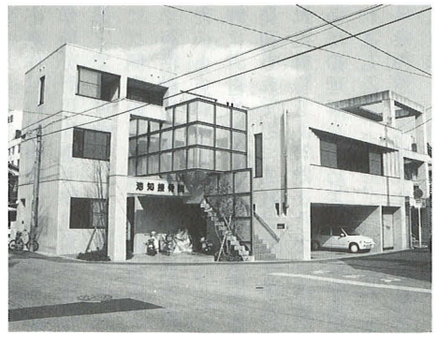
高知のアイデンティティのひとつに北山がある。ここは自然系のシンボルとしての環境を評価することが重要となる。その意義を理解したこの小学校は、木とコンクリートを調和させ、地域でのシンボル性を主張しながら清潔で周辺の環境と一体化した建物となっている。また、日本の伝統的な木の技法と洋風の小屋組みの技法を現代的にアレンジしており、気取らずにしっとりと落ち着いた印象を与えている。

高知市立久重小学校

入賞　池知接骨院〈発注者：池知正男、設計者：㈱デファンス建築設計事務所〉

都心地域では、個性的な自己主張型や防御型の建築が多く群としての街並みは混沌の表情となる。しかし、ここでは街並み空間の表現として打ち放しコンクリートとパンチングメタルをうまく組み合せて調和をとり、中庭をはじめ全体的な空間処理が優れており、周辺との調和性と街並み形成の方法論として評価できる。

（高知市都市景観懇話会委員）



池知接骨院

私の絵本の作り方

織田　信生

他に適当な呼び方がないので、絵本作家ということにしていますが、普段は絵を描いたり、教えたりしています。

描く方は、注文があれば注文のような絵を、なければ自分で描きたい絵を描きます。

教える方は週に二回、大人と子供の相手をします。なるべく人に会わないというのが私の希望で、できるだけ目立たぬよう、息をするのも控え目にしていますが、この大人と子供は別です。私が付き合うからには、決して上手くなろうとは思わず、ひたすら楽しんでもらいたい。

絵本は、だいたい一年に一冊のつもりです。そのつもりでやって、絵だけ描いたのが四冊、絵も文もというのが六冊、これでほぼ十年分ですから、結果として計算は合っています。

ときどき思い出したように絵を描いたり、文を書いたりしながら考えるわけですが、こちらの都合通りにできることはめったにありません。

そんな時、焦ったり腹を立てたりして、無理に作ろうとすると、変にこじれることがある。私と私の関係で、どうしてこんなことが起きるのか、理解に苦しむところです。

幸い私と私とは、四十四年もの間同じ釜のめしを食べた間柄です。お陰で最近になって、やっと気心が知れてきて、この問題解決の糸口をつかみました。作る前に何度かお伺いを立てるとよい。

ソロソロ　ドウカネ
ボツボツ　デンカネ

この場合、大切なのは、このソロソロとボツボツです。北山の方から、一片の雲が湧くように現れ、少しづつ形を変えながら南東へ、ゆっくりと流れていくような感じでないといけない。簡単なようで難しい。実は私もめったにできません。

しかし、どんな手を使ってでも、出てきてくれさえすればこちらのもので、後は順に作ることができます。この時の気分は、うれしいような淋しいような妙なものです。ゲームをする機械が、たった一台しかないパチンコ屋の、客兼経営者のような心境。

いま考えているのは、亀の話です。前にも亀と猫がいて、魚が降ってきたらどうなるかという話を、作ったことがありましたが、こんどの亀はまた違う。近所にモデルもいます。茹だるような夏の日、お城の堀で四本の足を伸ばし、じっと浮かんでいる亀。素晴しい、あの亀は、どう見ても何も考えていないように見える。

お堀には亀がたくさんいます。双眼鏡で観察していると、首の横に赤い筋の入ったのもいて、ギョッとしたことがある。大きなスッポンもいます。もちろん魚もいろいろいます。

のんびりしているように見えても、亀は意外にすばしっこい。よく見ると顔だって、油断ならんような顔をしています。あの水に浮かんだ、何も考えていないような格好は、人目を欺く仮の姿なのでしょうか。それとも何か、止むに止まれぬ事情があるのだろうか。

地方にいて、絵本を作るようなことをするのが難しいのは、仕事が少ないからではなく、才能と努力が足らないからです。十冊作って、そんなこともだんだん身に染みてきました。それでも何とかなるだろうと、のんびりしていられるのも、地方にいるからでしょう。

この一月に、ことわざを使った絵本を出しました。よく知られたいろいろなことわざを、切って、つなぎ直して、変なことわざを作り、それに絵を付けたものです。いろはガルタに倣って四十八。その中で、いま私が一番気に入っているのは次の通り。

すめばのとなれやまとなれ

（絵本作家）

個性があぶない

星野　光敏

「土佐人」は、難しい。高知に来て一年半。この地が、ますます分からなくなった。私の理解力の不足なのか。「県外人」には見えてこないのかも知れないが、いらだちと不安は募る。世界を見据えた人材を輩出した土佐。その脈絡はいま、どこにあるのか。

土佐の先人を解くキーワードは、いやらしいほどの個性だと思う。四国山脈の向こうをにらみ、強烈な個性から情熱をあぶり出していった。

その個性が、あぶない。ある音楽コンクールでのこと。中学校の優秀なクラブが、「仮に選ばれても四国大会には出場できない」と申し入れてきた。理由を聞けば、四国大会の日が校内マラソンの行事とぶつかり、「校内優先」だから、という。

高校野球大会でも驚いた。応援の生徒は少なく、にぎやかなマーチもない。聞けば、「野球だけを優先するのは問題で、応援態勢は組まないことになっている」とのこと。いずれも筋は通っている。民主的でもある。

しかし、ロマンがないではないか。ことに、演奏力の向上には他流試合が不可欠のはずだ。音楽の才能は誰にでもあるのではない。芽生えつつある才能、個性と、校内マラソンを引き換える、そんな民主主義は、壁の中に塗り込められたはずだが。

陽気さ、にぎやかさも土佐人の特性だろう。別に野球でなくてもいいが、どこかの場で声を張り上げ、連帯を確認してみたら。酒の席と、よさこい祭でしか、にぎやかさを発揮できないとすれば空しい。

植木枝盛、幸徳秋水など、当時としてはとてつもない発想で飛躍していった。横並びの民主主義では、決して育たなかったはずだ。日本の封建性を震撼させた人材を育てた風土ではないか。突出や例外を恐れるべきではない。

去年、県民は橋本大二郎氏を知事に選び、久しぶりに国民的舞台に上がった。単にタレント的人気ではなく、官僚統治への反発であり、沈滞する町の活性化を求めた選択だったと思う。高知の県民性は閉鎖的、と言われる。私も、そう思う。「県外人」という言葉は、その典型でもある。だが、「県外人・橋本」を圧倒的に選んだことに、壁の一つが取り払われる思いがした。個性を研ぎ澄ます触媒に、県外の血を求めた選択でもあった、と感じた。

栄光の歴史を背負う分、いまが物足りない感じを受けるのだろう。だが、輝かしい足跡は、新たな可能性への母でもある。ことに、高知の先人は人間を解放し、輝かせてきた人材だった。その軌跡を学び、形骸化し、押し付けられた遺産、官僚的な発想に「あばよ」を告げてほしい。かたくなで、分かりにくい土佐人には、魅力がない。

（朝日新聞高知支局長）

自然の恵みを宝として

佐竹由己子

二十七年間、転勤で各地を歩いてきた。東京在住が一番長かったが里帰りする度に、人々がゆったり生活している様子を見て、「高知はいいなあ」と溜息が出たものだった。縁あって六年前に帰郷、今ではすっかり「高知の人」になり切っている。

まず高知のまちの好きなところは「朝な夕なに近くにある山の姿、町の中を流れる川の姿を見て生活できる」、「日曜市を筆頭に毎日どこかに市が立っていて新鮮な海の幸、山の幸が手に入る」、「職住近接で満員電車も、車の渋滞もなくて出勤が楽である（高知のは渋滞のうちに入らない）」、「待ち時間なしで食事ができるし、タクシーが乗車拒否しない。催し物の切符がすぐ手に入る」など。これほど自然の恵みを浴び

て、こんなにストレスを感じることの少ない、暮らし易い高知のまちは大都市に住む人には「夢にまで見る憧れ」なのである。

しかし、県外のお客様をお呼びした時、困ること、恥かしいことが多いのも現実である。まず誰もが口を揃えて言うことだが、「交通網、下水道の整備が立ち遅れている」、「いいホテルやコンベンションホールが少ない」、「道路にゴミ箱が設置されていなくて町がゴミだらけである」、「子供の遊び場となる公園が少ない」など、町にゆとりがなくて観光の受け入れ態勢ができていない。また市民の側の民度も低いと思う。

例えば同じ地方都市でも石川県の金沢市などは、町の景観を美しく保つ為の市民の意識が非常に高かった。朝早く自分の店や家の前を掃除するのは金沢の人にとってはごく当り前のことで、長年そうしてきたことである。私たち高知市民もせめて自分の家の前だけはきれいにする努力をしてゆきたいと思う。

数年前に四国を訪れたアメリカの女性ジャーナリストは、日曜市を見て「まるでジャックと豆の木の世界、ワンダフル！」と言ったという。さんさんと降りそそぐ太陽の下で育った物を、何でも家から持ち寄って無雑作に並べて商いをする。「市の主役」たちもお得意さんたちも、誰かに逢えるのを楽しみに朝早くからやってくる。商売そっちのけで話がはずむ。土佐弁が飛び交う。そんな様子が欧米人の目にはメルヘンの世界に写ったのだろうか。三百年の歴史を持つ日曜市はスケールの大きさでも日本一、高知のまちの宝物として大切にしてゆきたい。

（高知情報ビジネス専門学校副理事長）

個性と特色ある都市づくり

西村　健一

私の所属する高知青年会議所では、一昨年より市民参加型連続セミナー「都市再開発セミナー」を実施している。

昨年十一月に発刊した小冊子「快適都市Ⅱ」にアンケートハガキを同封、市民七百人と青年会議所会員二百人を対象とした調査を実施した。

「高知市の特色ある建物・風景はなんですか？」という設問に対し、圧倒的に多かった回答は「高知城」「日曜市」であった。近代的な街並みとか、最近鳴り物入りで建設された建造物、例えば龍馬記念館、自由民権記念館の人気は今一つである。県民文化ホール、県庁、市役所、高知駅等の近代建築物への回答率はきわめて低い。

江戸時代から三百年の伝統的建造物である高知城と、伝統的街露商業施設である日曜市が市民に人気を保っているとは何とも皮肉な現象だ。

私が個人的に好きな高知の風景は、高知城前の藤並公園での「しろうと将棋」である。いつのころか将棋好きが集まって春夏秋冬やっているし、見物人も結構いる。自然発生的な市民サロンの様なものだ。

嫌いな風景は、改装された中心街商店街のアーケードである。人間味を感じないし、一昔前の押しつけがましい商業主義の雰囲気が好きになれない。清潔になったが、逆に特色のないアーケード街になってしまった。

都市計画事業や商店街の近代化事業がどうしても中央官庁や東京のプランナーの「指導」で実施されるからなのだろうか。莫大な資金を使用して、特色のない地方都市づくりを行政も民間も一生懸命やっているのではないだろうか。

人間同士のふれあいや、日曜市の雰囲気を生かした都市型施設や商業施設の建設を、行政、民間の指導層は真剣に調査し実行すべきである。

情報化時代であり老若男女は皆、見る目は肥えている。東京ディズニーランドを体験した子供は、レオマワールドに満足しない。砥部動物園を知っている幼児は野市動物公園に不満をもらす。高知の人口と経済規模であればこれくらいの施設と品揃えで十分だろうとたかをくくっていると利用者にそっぽを向かれてしまう。

今こそ高知市の文化遺産、建造物、風景、人情、生活習慣、都市施設の総点検を行政と市民各位で実行し、特色ある都市づくりを行う時期である。

「市民参加」「わかりやすいテーマ」「まちを誇りに思う市民の増加」「まちの有効資源の活用」等の成功要因がそろった都市こそ、特色ある都市と言えるのではないか。

（高知青年会議所副理事長）

文化のひろば――②

小さな書店の大きな挑戦

キリン館（宿毛市）

高知県の西端宿毛市に、一般の書店でベストセラーになるような本は冊もおかず、教育書と児童書ばかりを売って成功している書店がある。科学上の最も基礎的、一般的な概念を、熱心な教師なら誰でも子供たちに楽しく教えることができるように、「授業書」という形で授業の科学を目指している仮説実験授業というものがある。その仮説実験授業をすすめる全国の教師たちが「誇るべき存在」としている書店で、三十平方メートル余りの店内には、仮説実験授業関係の図書と教育書、学習参考書、子供のよみものがびっしり並ぶ。

特色は日本中で出される仮説実験授業関係の本が、総て揃っていることである。刊本だけでなく手書き原稿をそのまま印刷した手作り本も、ところ狭しと置かれている。ベストセラーを中心にして、売り上げ第一主義にはしる傾向の最近の書店界にあって、敢えてそれを置かずに、こうした本に限定して書店を経営することに、この書店が並みの書店でないことがわかる。今日の教育に対する高い志があってのことだろう。

店に入ると店主の岡田哲郎さんが柔和なまなざしで迎えてくれる。岡田さんは1種2級の障害者だが、いつも生き生きしている。会う人はみなその人柄に魅了される。熱い情熱をもって教育問題を語るのを聞いていると、こちらまでが熱してくる。

宿毛市のとなりの大月町の生まれ。愛媛大学教育学部を卒業後、中学教師となったが、三年目の夏、自転車からの転落事故で頸髄を損傷、身体が全く動かなくなり中村、高知、神戸と長い闘病生活を送る。リハビリの結果、一応の身のまわりのことと、松葉杖を使っての外出ができるまでになった。

闘病中に仮説実験授業の提唱者板倉聖宣氏の著書に接し、「こんな楽しい授業を教員時代にやりたかったなあ」とつくづく思ったという。この思いが一九八一年八月に「キリン館」となって花開くことになる。そして図書の販売とともに、板倉氏や研究会の人達の応援によって、仮説実験授業関係の図書の出版をはじめる。

キリン館

小さな書店の大きな理想への挑戦である。

仮説実験授業の板倉先生とは、キリン館開館以前からの付き合いで、先生の著書のほか、各地で活躍している仮説実験授業の実践書や研究書の出版に取り組む。北海道から沖縄まで、ひろく全国に読者を持つ。したがって店売りよりも、通信販売や研究会などでの出張販売が多い。障害をもつ岡田さんには出張販売は大変であるが、友人や奥さんの援助が大きな力になっている。それはまた、いろんな人に会える楽しさを彼にあたえてくれる。

仮説実験授業は、授業が楽しくなくなる最大の原因は、子供たちに十分納得のいかないことを押しつけていることにあり、本当に学ぶに値することは、楽しく学べる筈で、その学習の中で子供たちは大事なものを発見し習得する。楽しく学んだ知識こそが身につき、子供たちが自分の素晴らしさを発見する。そうした学習法、即ち「楽しい授業」をすすめる教育実践である。

全国各地で真摯な取り組みがなされており、キリン館はそうした教師たちの拠りどころとなっている。最も頼り甲斐のある書店であり、岡田さんはまたこの運動のよき相談相手である。

さい果て―というと、なんだか地方蔑視の語感があって好きでないが、高知県西端の小都市宿毛にあって、小さな書店キリン館が、全く地域性を感じさせない全国発信の活動を、気負いもなく続けていることは大いに注目されてよい。

文学散歩 ❷

椿の岬への旅

岡林　清水

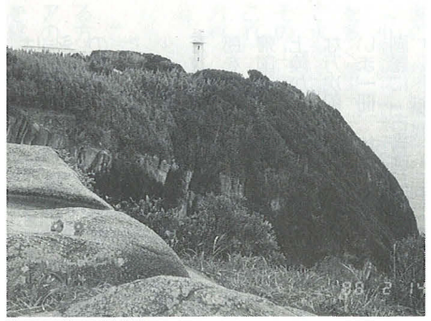
須崎を過ぎると久礼湾が見えてくるが、ここには弁天・観音の二島（双名島・大町桂月の短文あり）が浮かび、防波堤によって陸続きになっている。弁天島でヌードの弁天さまを拝してのち、高原の町、窪川で一泊すれば、霊験あらたかのはずである。終着駅というのは、何か旅愁を覚えるものである。

土讃線は、窪川駅で終わり、ここから新しく中村駅へ向かって土佐くろしお鉄道（中村線、四十三・四キロ）が始まる。

椿の岬への旅は、中村駅前から出る足摺岬行き急行バスや定期観光バスを利用する陸路と、高知港―以布利港を結ぶ「コーラル」（昭和六十三年七月二十五日就航）によって、珊瑚の海を幻想しながら進む海路とがあったのだが、昨年「コーラル」が廃止になったのは惜しい。

中村駅から土佐清水・浦尻経由でスカイラインを通って足摺岬まで、約一時間二十分のバスの旅である。終点でバスを降りて少し歩むと、椿のトンネルの中を行く自然遊歩道が岬の先端へ向かって延びている。

足摺岬には、赤い椿の花がよく似合う。足摺の椿は、初々しい魅力を秘めている。雨に濡れた岬の椿はひとしお美しい。アレクサンドル・デュマ・フィス（一八二四～一八九五）の『椿姫』（一八四八）を思い出す人もあるかも知れない。この花のもとで、数々の恋がささやかれたことであろう。それは岬の椿のみが知っている。


足摺岬

椿のトンネルを抜けると、白亜の灯台が目の前に見えてくる。灯台下の広場には、田宮虎彦の「足摺岬」（「人間」昭和二十四年十月号）の一節「砕け散る荒波の飛沫が崖肌の巨巌いちめんに雨のように降りそそいでいた」を刻んだ文学碑（昭和五十四年建立）がある。

灯台の背後、緑の樹林の彼方には、四国霊場三十八番札所金剛福寺が、夢幻性を漂わして仙島の如く浮かんでいる。この寺は古く、嵯峨天皇の弘仁十三年（八二二）、僧空海によって開かれたと伝えられるもので、嵯峨天皇の御宸筆「補陀洛東門」の勅額をいただく。といっても、仁王門にかかるのは模写したもので、真物は寺に秘蔵されている。本尊は空海作の高さ八尺の千手観音で、左右脇仏は、おのおの五尺の毘沙門と不動である。

『とはずがたり』の作者後深草院二条が、この南海の霊地足摺岬に、正安四年（一三〇二）の秋の頃あらわれたのも、千手観音にすがろうとしたためであった。この女性は、大納言久我雅忠の女で、椿の花にもたとえることができようか。

十四歳の春に後深草院の寵愛を受けたのだが、その前後にわたって様々な恋に翻弄され、その恋路の果て、観音信仰に生きようとして諸国遍歴の旅をつづけた。

夢幻漂渺の岬のほとりで、ひたすらに千手観音を拝してのち二条は、海路・陸路を織りまぜながら、数日間で安芸の羽根「里」に達し、やがて椿の花の流れ行くか如く、瀬戸内海へ回って行った。

（高知大学名誉教授）

光る実務経験者の目

『高知県の工業』

水田満寿男

筆者の清遠さんは、かつて基幹産業とうたわれた港六社の重化学工業地区で、我が国の高度成長の一翼を担った技術者の一人である。

増産に次ぐ増産で、次から次へと工場設備の拡張が続き、公害防止技術も飛躍的に進められた時期であった。

工場実務経験の無い学者・評論家の著書は多いが筆者のような技術者に依るものは稀である。特に氏は燃料化学の専門家として、合金鉄、カーバイドの製練に長年たずさわった実績があり、この著書の随所にそれが強く感じられる。誠にそれらの意味でも必読に価する著書である。

遠く有史以来、藩政時代を通じ祖先が郷土で営んできた生活に密着した産業活動から説き始め、中核は現代の産業全般と教育・行政まで論じている。それは、機械工業、造船、木工、金属工業等々枚挙にいとまなく、はてはエネルギー・情報産業にまで及んでいる。

しかも市井に埋没しつつも、その道一筋に焼却炉に取り組む一工業人や、きびしい合理化追求の波を受け閉鎖された工場群にも言及している。

このことは、四散した工業人・技術者達に想いを至すよすがともなり、共に今日の豊さをもたらした人々への感謝の意味が言外にこめられており、筆者の内面の優しさが伺える。

とまれ、軽快なタッチで筆を進めており図表、挿入写真と相まって、固くなり勝ちな論説をソフトに展開している。

産業の振興には長期的な視野と展望が必要であり、物・金よりも心の豊さを求める地方文化の時代と説き、最後に未来は美しい環境とともに栄えなければならないと結んでいる。

清遠氏のこの著書をトリガーとして、それぞれの分野からより深く掘り下げた専門技術者による著書が、続々と出て来ることを切望してやまない。

（㈳高知県技術者協会理事長）

高知出版情報

土佐人に取材した評伝・小説

漂流一五〇年記念出版として雄松堂から出た『ジョン万次郎漂流記』はエミリー・V・ウォリナー著、宮永孝解説・訳。ウォリナーはハワイの新聞「フレンド」編集長など務めた人。万次郎に海外から照射した数少ない著作の一つである。『ジョン万次郎物語』は沖縄の「ジョン万次郎を語る会」からの刊。長田亮一著。帰国第一歩を印した摩文仁海岸への上陸から翁長村逗留の記録は、新たな万次郎を浮かび上がらせている。

いま一冊、『雄飛の海』は永国淳哉著。副題に「古書画が語るジョン万次郎の生涯」とあるとおり、豊かな資料を紹介しながら万次郎の実像に迫る貴重な一書。高知新聞社刊。

『中江丑吉と中国』は、ジョシュア・A・フォーゲル著・阪谷芳直訳。丑吉は兆民の子、一九一四年、中国に渡り北京の市井にあって中国政治思想の発展と、日本の将来への論理的哲学的理解に努めた。その人生と学問の内奥に迫った初めての評伝。岩波書店刊。

『民権の獅子』は副題を「兆民をめぐる男たちの生と死」とする。日下藤吾著で叢文社刊。中江兆民の生涯を、大久保利通、江藤新平、幸徳秋水、田中正造、宮崎滔天、頭山満等を描きながら浮かび上がらせる。

『オリンポスの黄昏』は田中光二著、父田中英光に対して、無視する態度を続けてきた著者が、ようやく素直に理解できる年齢と心境に達して、父親に向かいあったという一書。英光へのこの上ない鎮魂歌であり、深い人間愛が伝わってくる。集英社刊。

『土佐と明治維新』は、「中岡慎太郎をめぐって」と副題がつき近藤勝の著、新人物往来社からの刊。維新回天に果たした慎太郎の識見や業績の再評価を願っての、情熱を注いだ一書。

『虹の断橋』は嶋岡晨著。朝日新聞社刊。自由民権の理想社会の実現をめざし、ついには大逆事件に巻き込まれ刑死した、奥宮健之の生涯と思想を熱っぽく描く。

土佐の人物に取材した稔り多い評伝・小説の続出した昨今であった。

（憲）

第8回高知の映像コンテスト　特選

高知を撮る

裏通りの子供達

坂本　厳

風呂

慌ただしい一日の仕事を終えて帰宅の後、ゆったりと風呂に入る。この醍醐味は日本人なら誰しも頷けるところ。四季を通じて湿度の高い日本では、風呂は生活に欠かせない。

風呂に入ると言えば、湯に入ることだが、昔は蒸気で蒸される「蒸し風呂」に入ることを意味した。例えば清少納言の『枕の草紙』には、

「小屋あってその内に石を多く置き、これを焚きて水を注ぎ湯気を立て、その上に竹の簀を設けてこれに入るよしなり、大方村々にあるなり」とある。当時蒸し風呂が地方にもあったことがわかる。

この焼け石に水をかける方法は、北欧、シベリアの風習といわれ、朝鮮を経て伝わったという説が有力である。それが江戸初期には膝位の湯に入って、蓋をしめる半蒸半浴の形をとるようになり、さらに江戸中期ごろから浴槽に一杯水を満たす現在のような入り方になった。

筆者の子供のころは、蓋に蝶番のついた前蓋があって、半蒸半浴のはいり方をする風習が残っていた。たまたま親戚の家に行ったとき入ったのだが、ぷかぷか浮いている底板を踏んで、おそるおそる中に入り、静かに蓋を閉めて湯に温まる。蓋を閉めると風呂桶の中が真っ暗になり、怖かった。考えて見ると、当時の風呂場の電灯も、幽霊が出そうなほの暗さだった。

風呂といえば、やはり銭湯だが、江戸に初めて銭湯ができたのは天正十九年（一五九一）とされる。徳川家康が江戸に入って一年後のことである。上方の銭湯は昼頃からはじめるところが多かったが、江戸では朝から沸いていた。江戸っ子に朝湯はつきものだが、江戸は強い風が吹き土埃がひどく、入浴せずにはいられなかったのだ。

汚れを流すだけでなく、社交場としての役割を果たしていた銭湯も、時代の流れには逆らえず、次々と姿を消して、いまは内湯の時代になった。それとこれとがどんな関係があるのかよく分からないが、最近の若者たちの入浴マナーの悪さは、こうした場における社会的マナーがしつけられなくなったことによるのか。温泉などで閉口してしまうことがときどきある。

（晋）

風俗歳時記

「グループ〝音〟」

仲間とともによりよい音楽を

中島　亨

グループ〝音〟は「心のかよいあう仲間とよりよい音楽を」という願いのもと、一九八四年に結成されました。メンバーは、器楽・声楽の部門で高知市を中心に第一線で活躍しておられる方々ばかりです。発足当初は十一名でしたが、現在は十六名に輪が広がりました。紹介しますと、井内若乃（ソプラノ）、大野美鈴（ピアノ）、甲藤卓雄（フルート）、小佐井淑子（ピアノ）、小林好恵（ソプラノ）、須賀陽子（ヴァイオリン）、寿美玲子（ソプラノ）、曽我部修（バリトン）、竹村正（ピアノ）、竹本佳加（ピアノ）、筒井裕子（ピアノ）、中島亨（クラリネット）、中島政子（ソプラノ）、西沢沙璃（チェンバロ）、前田多嘉子（ピアノ）、明神あけみ（マリンバ）、筒井泰子（事務局）。

年間行事は、秋の県芸術祭共催行事、定期演奏会と地方公演、それに今ではお正月のイベントとしてすっかり定着し、音楽ファンに親しまれているニューイヤーコンサートが主なものとなっています。

われわれは、グループ〝音〟の演奏会をとおして、メンバー相互の研究・親睦を深め、音楽の意味・世界を探るべく真摯な姿勢で活動を展開しているところです。こうした取り組みが、県音楽文化発展に少しでもお役に立つことができましたら望外の喜びとなることでしょう。

連絡先　高知市西町三五
電　話　〇八八八－七二－三三〇二

「女性史研究会」

過去と現在と未来を

宮本美知子

女性史研究会は、発足してから十年余がたちました。このサークルは、もともと高知短期大学の学生達が、同大学の佐藤基子先生を助言者として始めたものです。

女性の問題についての書物の読書会を中心とし、その論旨をまとめたり、感想を述べあったりしていますし、一人では読み続けられないような古典の長文などを楽しく読破しています。また新しい時代の新書版の論文を読んだりもします。

書名を挙げてみますと、「婦人論」ベーベル、「第二の性」ボーボアール、「女性解放思想の歩み」池田珠枝などです。今は「女性の解放」ミルをテキストに学習をしています。単にテキストの分析や意見交換だけでなく、自分の実生活から感じた女性問題についても、活発に述べあうのです。結婚や家事の問題、夫婦別姓、女性と職場、子供の教育、老後の問題などです。

月に一回、高知短期大学四階の資料室に集まっていますが、参加者は十名前後、年齢や職業も様々です。

ただ一つ残念なのは男性の参加者がないことです。「来るもの拒まず、去るもの追わず」をモットーにしていますので、男女、年齢、職業、思想信条を問わずお気軽にご参加下さい。

連絡先　高知市旭町
二－二二－五七－六〇二
電　話　〇八八八－七三－九八二九

「高知室内管弦楽団」

アマチュア仲間が和を求め

小松　知津

平成三年三月、高知室内管弦楽団は、アイネ・クライネ・ナハトムジーク、他で産声をあげました。百人程の聴衆を前に、何カ月かの練習の成果が、その誕生のもととなりました。そして、この一年、数回のミニコンサート、第一回定期演奏会と、やっとこれからの方向が見えてきた所です。十余名の団員の大半は既成のアマチュアのオケにいた者達であり、弦楽合奏をもっと丁寧に練習して楽しみたい、御座なりにしがちな小品を木目細かく学んで、アマチュアの原点に戻ろう、が願いでした。その意見に賛同して下さった相愛大学教授の酒井睦雄先生の協力を得て、厳しい中にも鷹揚な先生の姿勢が、前途多難な演奏活動への支えです。

また、この秋には、指揮者を同じくする芦屋室内合奏団との合同演奏会も控え、三月二十一日には十四名来高し、薊野、品原設計事務所で室内楽の夕べと銘打って懇親会を持ち、翌日は、市青年センターにて合同練習を済ませました。音楽が、初めて会う人達を旧知の友のようにし、家族の和を作る、この喜びが誰もの物で有りうる事をそれぞれが確認し合う事が出来、これからも私達の原点である事を忘れずに、精進してゆきたいと思いました。演奏にも出かけます、どうぞお気軽にご連絡下さい。

連絡先　高知市廿代町一四－一五
パル内
電　話　〇八八八－七二－一八八一

「百人一首高知かるた会」

かるた早取り競技の魅力にひかれ

西内　康夫

「小倉百人一首」、皆様方も、お正月などにかるた取りや坊主めくりなどで遊んだ経験があるのではないでしょうか。

今から七五〇年程前、藤原定家が選んだといわれる百人一首は、今も私たちの生活の中に、いろいろな形で生きているのです。

ところで、テレビなどで、かるたの早取り競技をごらんになられた方も多いと思います。実は、この「競技かるた」のルールは、明治三十七年、安芸市出身の黒岩涙香が考案したものなのです。

高知かるた会では、四十人の会員によって、この伝統の「百人一首競技かるた」を伝承しています。お年寄りも居られますし、小学生の間でも、熱心にとりくんでいるグループがあります。

かるた競技は、古典文学にふれると同時に、心身の鍛練にも役立ちます。集中力や反射神経を養うこともできます。十数名の有段者は、ほとんど毎週練習しています。高知市中央公民館では、「県選手権」、「高知市長杯」、「県市教育長杯」、「県知事杯」、「県議会議長杯」など、公共機関のバックアップもあって、年間数回の大会を開いていますし、また、初心者中心の指導練習会も行っています。

古典文学と現代のスポーツが合体した百人一首かるた、あなたもぜひ一度、挑戦してみてください。

連絡先　高知市南はりまや町
一－一六－四　吉本方
電　話　〇八八八－八三－一四八五

散歩の途中で

桟橋通り三丁目、高知市水道局入り口のコグマザサの植え込みの中に、新緑に埋まるように石のモニュメントが建っている。このモニュメントは、三色の波打つフォルムで豊かな川を表現し、「その流れを地水火風として万物の命である水を祀」ろうと1984年に作られたもので、その名も〝水神さん〟。鳥居も社もないけれど、水についてふと考えさせられるシンボルの一つである。

風俗

スカラ座とサンジェルマン

何の模様も飾りもない純白の、しかし極端に厚手で、手に持つとズシリとした重みのあるコーヒーカップを一個持っていた。

まだお若い時分の故・八波直則高知大名誉教授が拙宅に来られた時に、とても気に入っていただいたことを思い出す。

実はこのカップにはモデルがあって、同じ感じのする物をあちこちと探したものだ。

その本家は、新宿歌舞伎町にある喫茶「スカラ座」で、学生時代に、店内の一方の壁面全体に広がる巨大で最新のハイファイスピーカーで古典音楽を聞きながら、このカップを手に過した時間が何百時間かはあった。

このスカラ座が風俗産業のメッカとなった歌舞伎町に今も続いていて、先日三十年ぶりに立寄った。店の雰囲気はいささか変っていたが、カップは当時のままで、一瞬、昭和三十年代の新宿の街が湯気の向うに蘇った。

これとほとんど同じ厚みと重さを持った別のカップを一つ見つけている。徳島県阿南市の国道55号線沿いの「サンジェルマン」という店だ。わずかに地中海ブルーの色彩を一部に配しただけが違いのこのカップの為に、55号線を走るときはここに立寄る。

ミラノとパリという二つの都市の間と、新宿と阿南市の間の距離はどちらが遠いのか、などと考えながら。

全国でも有数の喫茶店の普及率を誇る高知市で、カップの魅力にひかれて訪れる店は、まだない。

（南北）

土佐を味わう料理教室

（全4回・定員30人）

講師　松崎　淳子氏
（高知女子大学名誉教授）

手を伸ばせばすぐそこにある高知ならではの旬の材料を使い、風土に根ざした調理方法や伝統の味を学ぶ講習会です。

山菜の味わい（5月9日）
イタドリの炒め煮・鰹のあら炊き・若竹汁・エンドウ御飯

鰹をさばく（5月16日）
本格たたき・あら入りの味噌汁・ねぎの酢味噌和え

寿司でもてなす（5月30日）
タチウオのかいさま寿司・山菜寿司（ミョウガ・リュウキュウ）すまし汁

夏に向かって（6月6日）
リュウキュウの酢の物・鳥肝とニンニクの炒め煮・鯛そうめん・梅酒羹

時間　毎週土曜日10時～13時

参加費　4800円
（4回分・材料費・テキスト代）

会場　潮江市民図書館実習室

申し込み　事業団まで電話でお申し込み下さい。定員になり次第締め切ります。

文化高知の定期継続読者
賛助会員募集中!!

会費　年 2,000円（前納）

特典
① 機関紙「文化高知」を年６回お手元にお届けします。
② 事業団発行の出版物の10％割引（一部例外あり）
③ 主催事業や刊行物の案内（マスコミ利用の場合あり）
〔※上記特典は申し込みいただいた日から１カ年有効〕

申し込み　①郵便振替　②現金書留　③直接事業団へ…
いずれの方法でもけっこうです。

市民フロアがオープン

展示や会議にご利用下さい

市民の皆さん方の文化活動の場として、「市民フロア」が、四月二日からオープンしました。

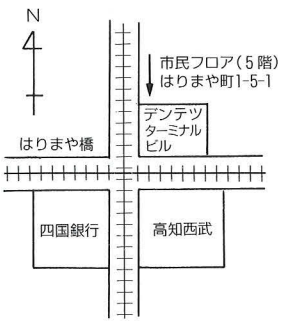
室内は布クロス仕上げで、絵画や写真などの展示に、また四十名程度の会の出来る会議用として、ご利用いただけます。

◆休室日
㈠毎週水曜日
㈡十二月二十八日～一月四日

◆使用時間
㈠展示　午前九時～午後六時
㈡会議　午前九時～午後九時

◆使用料
㈠展示
一日　一一、〇〇〇円
一週間七〇、〇〇〇円
㈡会議
午前九時～正午　四、〇〇〇円
午後一時～五時　五、〇〇〇円
午後五時～九時　五、〇〇〇円

◆所在地
高知市はりまや町一－五－一
デンテツターミナルビル五階



◆お申し込み
本町五－二－三 自治会館二階
(財)高知市文化振興事業団
（電話七三－四三六五）
に使用申込書を提出下さい。

財団法人 高知市文化振興事業団　〒780 高知市本町５丁目２番３号　TEL(0888)７３－４３６５
郵便振替 徳島 8-14869